



TITLE:

一大天文臺を鹿兒島に建設せよ

AUTHOR(S):

權藤, 穰

CITATION:

權藤, 穰. 一大天文臺を鹿兒島に建設せよ. 天界 1932, 12(138): 352-353

ISSUE DATE:

1932-09-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162265>

RIGHT:

一大天文臺を鹿兒島に建設せよ

權 藤 穰

一大天文臺を九州に求む。しかもわれらはそれを九州の南端鹿兒島に求むるのである。

文化の光の波及し遅れてゐるこの僻地に、何が故にかゝるものを求むるか？

少くとも一ヶ年の明け暮を鹿兒島で送つた人は誰しもかゝる経験をなしたとは否めまい。即ち四季における南國の氣相の清澄など。春は暮れても玲瓏の夜はこゝ獨特である。濃藍色の夏夜の空にキララと瞬き羅布する美しい星群、秋は靜夜、そして冬は雪雲に蔽はるることなく、水銀色に凍りついた大宇宙にひとり跳り舞ふ弦月の姿、この麗はしい天體を頂いて、夜靜かに眠りを貪る傳説の都鹿兒島を、そのまゝ舊幕時代の遺物として放つておくほどに現代人は悠長ではないのだ。

統計によれば一年間を通じて百廿日の星月夜を持つてゐる此の地、換言すれば一年間の三分の一は層雲に妨げらるゝことなく星群が宇宙を遊行するのを明らかに見得るのだ。京都が一ヶ年わづか八十日の晴夜に恵まれてをるのに比べると裕に四十日の大差違があるではないか。臺灣に比べてもしかり。地の利を得て最大多數の晴夜を有するのは鹿兒島が本邦唯一の都なのだ。天體觀測の第一條件は氣相の明晰にある。〔廿八インチ〕の望遠鏡と〔卅インチ〕の寫眞用反射鏡等設備完成してゐるグリニチ天文臺も、テムス河面から蒸騰する蒸氣と市街の煤烟とに妨げられて可惜その能力を十二分に發揮することができないといふ遺憾な状態にあるのだ。京都の天文臺も同様の障害に悩まされ、一年間二百八十五日といふ多數日は、人に譬へると切齒扼腕ともいふ可きお氣の毒な状態にあるのだ。求む可きはその地位と設備である。

加ふるに、宇宙を遊行する廿の一等星の中、此の地から見るものできないのは僅に三つ、巨人座に二個、十字座に一個なのだ。東京および京都の天文臺がなんぼ焦つても觀測するものできない南方の老人星は此の地に立てば、嚴冬の夜、水銀色に凍つた南の空遠く地平線上に明滅するのを望むことがで

きるのだ。

かゝる好適の地が、なぜに今日まで識者によつて等閑に附せられてゐたか。怪しむはひとり吾人のみではあるまい。一年間を通じて、かくも多日数の晴夜に恵まれてゐる本邦唯一の地、しかもかくも有利な天體の觀測圈を有するの地、ここにわれらは一大天文臺を切に求めるのである。望遠鏡は六十センチ、長さは最短限度十メートルを重要品とする一大天文臺を求むるのである。

かくして徒らに南國の都をして情熱一途に終らしめることなく、冷やかな科學のメスをして南國人への唯一の興奮劑たらしむべく、かつ傳説の都はこの科學の所産たる天文臺の進出によつて毫もその古都たるの美を傷はるゝことなく、却てエジプト、バビロンの古代より傳はる星群の神秘が此の地の古都的價値を上ぐるに不尠、力あるは疑ひを容れぬ處であらう。

米 國 よ り 通 信

淺學の私屢々萬國時、日本時等を米國太平洋沿岸時に換算閉口候まゝ別紙の如きものを愚考候が、或はより完全平易なるものが既に考案せられ居る事と推察候が、未だ斯くの如きもの御座無く候へば「天界」の一頁を割愛して正確なるものを印刷せられ、切り取りて厚紙にてもはりて机上に供へおくならば、我々の如き素人には多少のヘルプ (help) になりはせぬかと存じ御送り申し上げ候間御笑覽下され度、勿論取捨は貴會の御勝手に御座候。

末筆乍ら貴會會員中にて何か當國にて御用も御座候へば喜んで出来るだけの事は致すべく候

一九三二年二月二十五日

長 田 政 二

M. Nagata

P. O. Box 263, Brawley, Calif, U. S. A.